

原著論文

教示の違いが描画に与える影響 樹木画テストについて

中京大学心理学部 初山 七海
中京大学心理学部 馬場 史津

Effects of instruction on tree drawing

MOMIYAMA, Nanami (School of Psychology, Chukyo University)
BABA, Shizu (School of Psychology, Chukyo University)

The current study examined differences in participants' behavior when undertaking a drawing task with different types of instruction. We carried out a tree-drawing test with 20 participants. In the standard instruction condition, participants were instructed to "Draw one tree". In the high-pressure instruction condition, participants were instructed to "Draw one tree as well as possible". The results revealed that the high-pressure instruction was associated with longer drawing time. In addition, the high-pressure instruction caused participants to imagine and draw a more realistic tree, including additional details in the branches and trunk. The size of the drawing and the pressure of the pen exhibited no differences between conditions. As a reason for drawing different drawing, the high-pressure instruction condition led participants to want to draw a realistic image. In addition, participants wished to draw a different tree compared with the previous task.

Key words: tree drawing, standard instruction, high-pressure instruction

問題

樹木画テストは木の絵を描かせる投映法の一つで、心理アセスメントの補助手段として用いられる。しかしながら、教示は一つではない。例えば Koch (1952 林・国吉・一谷訳 1970) は「実のなる木を1本描いてください」と「実のなる木」を指定するが (Koch 法), Buck (1948 加藤・荻野訳 1982) は「木を1本描いてください」と「実のなる木」ではなく、単に「木」を描くように教示する (Buck 法)。大辻・塩川・田中 (2003) の研究では、幼児および高校生のいずれにおいても、Koch 法は Buck 法よりも、有意に高く実の描画が出現したことが確認されている。これは Koch 法が実の描画誘導性を高めることを示し、教示が描画に影響を及ぼすことを意味している。また、林 (1978) の「実のなる木を上手に描いてください」や Koch (1957 岸本・中島・宮崎訳 2010) の「果物の木を1本上手に描いてください」のように、描き方を指定する教示も存在する。

描画テストを実施するうえで、「上手に描いてく

ださい」という教示はどのような意味をもつのであろうか。降旗 (2016) は小学生から大学生を対象に、図画工作・美術の苦手意識を調査した。その結果、小学生は2割未満、中学生は約5割、大学生では約6割に苦手意識があり、その理由は、上手に作品ができないこと、絵が下手であることを強く意識したことが挙げられている。また、短大生を対象にした図画工作や美術に関する意識調査では、約3割の学生が「嫌い」と回答し、「不器用だから」「イメージ通りに形にできない」などの技術面が理由に挙げられている (花田, 2018)。これらの研究から、図画工作・美術では「上手に作らなければならない」という気持ちが苦手意識に繋がっていることが考えられた。

心理テストとして描画を用いる場合、「上手下手は関係ありませんので、自由に描いてください」と教示することが多いが、「上手に描けない」と拒否されたり、苦手意識を表明する被検者は少なくない。しかしながら、描画テストにおける「上手に描く」意識が、描画表現にどのように影響するのかについて検討された研究はみあたらない。そこで本研究で

は、「木を1本描いてください」と「木を1本できるだけ上手に描いてください」という二つの教示を用いた樹木画テストを比較し、「上手に」という教示が描画表現にどのような影響を及ぼすのかについて検討する。

方法

1. 対象者

大学生20名(男性3名,女性17名)を対象とした。平均年齢は21.40歳(SD=0.58)であった。

2. 手続き

A4画用紙,4B鉛筆,消しゴムを準備し,個人法で実施した。描画の前に対象者の美術経験を尋ねた。ここでの美術経験とは,学校での美術の授業は除き,趣味としての絵画や部活動とした。

Buck法を参考に「木を1本描いてください」を標準教示とし,「木を1本できるだけ上手に描いてください」を圧力教示とした。対象者には2週間の間隔で2回の描画を行った。その際,教示の順番による影響を考慮し,1回目に標準教示を行う群(10名)と,1回目に圧力教示を行う群(10名)に分けて実施した。

それぞれの描画を理解するため,対象者には「どのような木ですか」といった描画後の質問(Post Drawing Interrogation:以下PDI)を行った。また2回目にはPDIに加えて,「教示の違いに気付いたか」,「教示の違いをどのくらい意識したか」,意識した場合には「どのようなところを意識して描いたか」,「上手にと言われてどのように感じたか」の質問を設定し,10分程度のインタビューを行った。

3. 倫理的配慮

実施にあたっては,調査への協力は任意であること,描画の途中であっても中止できること,個人が特定されない形で論文に絵やインタビュー内容を掲載する可能性があることを説明して,書面にて同意を得た。

結果

対象者20名の標準教示・圧力教示の描画40枚を検討した。美術経験のあった対象者は5名であった。教示の違いに気が付いた対象者は11名(55%),そのうち8名は教示の違いを意識したと話した。残りの3名は教示の違いに気付いたが意識はせずに描いたと話した。

1. 描画時間の比較

対象者ごとの教示別描画時間を測定した結果,標準教示では16(s)~833(s)の範囲で,平均値は196.40(s)(SD=219.11)であった。圧力教示では15(s)~1230(s)の範囲で,平均値は214.05(s)(SD=276.75)であった。両教示の描画時間の平均値を比較するために,対応のあるt検定を行った。その結果,有意な差は認められなかった。

圧力教示の描画に時間をかけた対象者は14名(70%),そのうち標準教示の倍以上の時間をかけた対象者は6名であった。標準教示の方が時間がかかった対象者6名(30%)のうち,圧力教示の倍以上の時間をかけた対象者は3名であった。

2. 描画指標の比較

標準教示,圧力教示における描画指標の特徴をTable 1にまとめた。

Table 1 標準教示,圧力教示における描画指標の特徴

	変化あり	変化なし	標準教示から圧力表示への変化の特徴
サイズ	5名(25%)	15名(75%)	4名はより大きなサイズへ変化した
根	7名(35%)	13名(65%)	
幹の太さ	8名(40%)	12名(60%)	5名はより細い幹へ変化した
幹の表面	8名(40%)	12名(60%)	5名は幹の表面描写ありへ変化した
枝	11名(55%)	9名(45%)	5名は枝ありへ変化した
樹冠の形	3名(15%)	17名(85%)	
樹冠の内部	7名(35%)	13名(65%)	
付属物	5名(25%)	15名(75%)	3名は付属物なしへ変化した
筆圧	4名(20%)	16名(80%)	2名はより薄い筆圧へ変化した
陰影	3名(15%)	17名(85%)	

(1) サイズ

サイズは、描画されている範囲が用紙を格子状に9分割したうちの、1～3領域を小、4～6領域を中、7～9領域を大とした。その結果、5名(25%)がそれぞれの教示でサイズの異なる絵を描いた。5名のうち4名は、標準教示より圧力教示のほうが大きいサイズになった。

(2) 根

根の描写について調べた結果、7名(35%)が教示によって異なる絵を描いた。標準教示と圧力教示の違いは、標準教示で根が描かれたが圧力教示で描かれなかった対象者が3名、逆に標準教示で根がみられず圧力教示で描かれた対象者が3名であった。その他が1名であった。

(3) 幹

幹の太さは原・石関・田副・中村(1990)の基準を参考に、5cm以上の太さの幹を太い幹、2cm以下の太さの幹を細い幹とした。その結果、8名(40%)は教示によって異なる幹の太さで描いた。標準教示では太い幹を描いたが圧力教示では細い幹を描いた対象者が5名、逆に標準教示で細い幹、圧力教示で太い幹を描いた対象者は3名であった。

幹の表面の描写について調べた結果、8名(40%)は教示によって絵が異なった。標準教示では幹の表面に線などの描写がみられたが、圧力教示で描かれなかった対象者が2名、逆に標準教示で幹の表面の描写がなく圧力教示で描いた対象者が5名であった。残りの1名は、幹表面の線の数が異なっていた。

(4) 枝

枝の描写について調べた結果、11名(55%)が異なる絵を描いた。標準教示では枝がみられなかったが、圧力教示で分枝や切断枝を含む枝がみられた対象者が5名、逆に標準教示で枝がみられたが、圧力教示でみられなかった対象者が2名、どちらの教示でも枝がみられ、枝の特徴が異なる対象者が4名であった。

(5) 樹冠

樹冠の形では、3名(15%)が異なる絵を描いた。標準教示で雲形の樹冠が描かれ、圧力教示で雲形の樹冠が描かれなかった対象者が2名、逆に標準教示で雲形の樹冠がみられず圧力教示で描かれた対象者

が1名であった。

樹冠の内部の描写では、7名(35%)が異なる絵を描いた。標準教示で茂みや葉が描かれたが圧力教示で描写がみられなかった対象者が3名、逆に標準教示で樹冠内部の描写がみられず、圧力教示で描かれた対象者が2名であった。葉の有無は変わらないが、量や茂みに変化のあったものが2名であった。

(6) 付属物、筆圧、陰影

付属物は5名(25%)が異なる絵を描いた。標準教示で付属物があり圧力教示でなかった対象者が3名、その逆が2名であった。また、4名(20%)は筆圧が異なり、筆圧は標準教示では普通の筆圧であったが、圧力教示では薄い筆圧だった対象者が2名であった。一方で、標準教示では普通の筆圧であったが、圧力教示では濃い筆圧だった対象者が1名であった。その他の違いが1名であった。陰影では3名(15%)が異なる表現を用いた。標準教示で陰影があり圧力教示で陰影がなかった対象者が1名、逆に標準教示で陰影がなく、圧力教示で陰影をつけた対象者が1名であった。その他が1名であった。

考察

1. 描画時間

両教示の描画時間を比較した結果、平均値には有意な差は認められなかった。描画時間は個人差が大きく、そのため個人内の差をみることにした。その結果、圧力教示の方が時間をかけて描画した対象者は、全体の半数以上の14名であり、圧力教示により描画時間が増加すると考えられた。

「上手に」との教示で時間をかけて描画した対象者は、「上手く描かなきゃと思って時間をかけて試行錯誤した」「時間をかけて描いた方が上手さというか自分の思った通りには近くなった」と述べており、上手く見せるために時間をかけようという意識が働いたものと考えられる。また、「(標準教示では)考えるよりも描いちゃおうと思って描き始めたけど、(圧力教示では)どうやって描こうか考えてから描き始めた」「(標準教示では)描きながらイメージしてた感じだけど、(圧力教示では)イメージしてから描いた」と述べた対象者もみられた。

描画テストにおいて「上手に」という教示が用いられた場合、上手く見えるための試行錯誤や、あらかじめイメージを固めてから描くという行為が生じ

る可能性がある。描画テストは比較的無意識の感情が反映されると仮定され (Hammer, 1958), 試行錯誤しながら美的な価値を志向する芸術表現とは異なる。あまり意図せず表現された内容にこそ、描き手が意識しない心の内容が表れ、そこから描き手のパーソナリティが読み取れるのである。上手に見えることを意識し、模索して描かれた絵は無意識的な表現とは言えず、性格テストとして解釈することは困難になる。「上手に」と教示することによって、時間をかけて丁寧に描画することになっても、このような心理的働きが生じるのであれば、描画テストの教示として適切とはいえないであろう。

2. 描画指標の比較

(1) 影響を受けやすい描画指標

二つの教示で最も異なった描画指標は枝で 55%, 次いで幹の太さ、幹の表面が 40%であった。

ある対象者は、「イラスト。だから直線じゃないけど1本で描いた。(イラストは) あまり枝とか詳しく描いてないの多いから (Figure 1)」「上手に、と言うのでリアルに描こうと思って枝を描いた (Figure 2)」と述べた。他の対象者からも、圧力教示時の PDI で「リアル」や「立体感」という言葉が何度も登場していた。圧力教示によって枝や幹の表面が描写された背景には、「写実的な絵を描こう」という意識が関連しているものと考えられた。

本研究で得られた 40 枚のすべての描画に幹と樹

冠がみられ、この二つは木を描くための最低限の要素である。幹を細くすることでその外側の空間を広く残し、枝を加えることで写実的な木に見える工夫がなされたのかもしれない。枝や幹の表面の描写は、描画プロセスの後半で描かれやすく、違いが表れやすい箇所であろう。

樹皮を詳細に描くことや、強い陰影を用いて樹皮を推敲しすぎる場合は、自分と環境との関係に不調和感を抱き、外界への防衛的態度が強いと解釈される (高橋・高橋, 1986)。しかし、本研究の PDI では「本物に近い感じで描いた」と述べた対象者がみられた。現実的な木に近づけるために幹の表面を描く場合もあり、描き手の意図について PDI で確認することが必要である。

一方で、「リアルな木をイメージしたけど、それは自分の画力では無理だなと思った」のように、写実に描きたいとは思うものの、浮かんだイメージを技術的に表現できず、描かなかった例がみられた。また、「根っこはどうなっているかわからない。あまり見ない部分だからイメージするのが難しかった」と述べた対象者のように、形を想像することが難しい箇所は省略される可能性が示された。つまり、「上手に」という圧力教示は写実的な木を描くように方向づけしやすく、表現としては描きこみを増やす場合と、逆に上手く描けない箇所は省略するという二つの形があると示唆された。

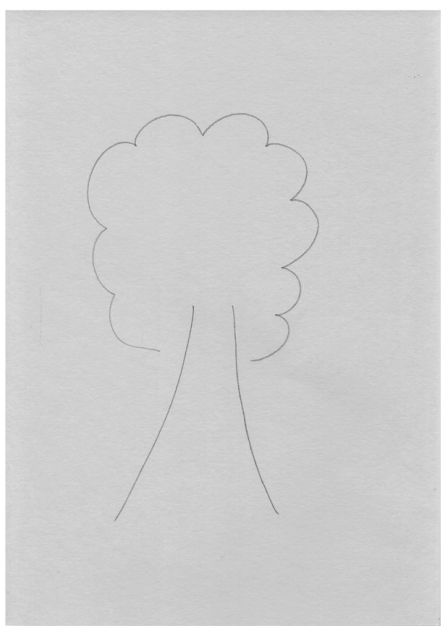


Figure 1 標準教示

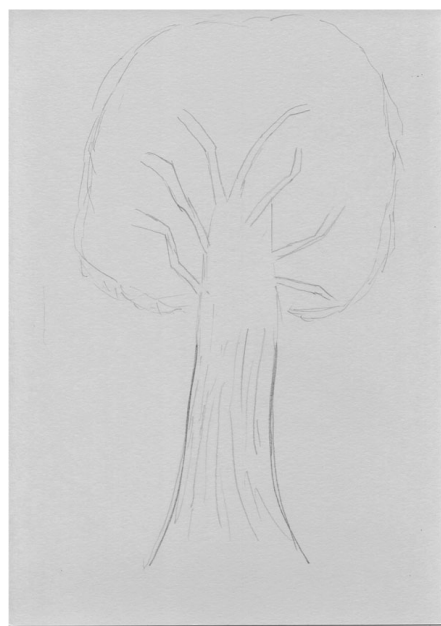


Figure 2 圧力教示

(2) 影響が少ない描画指標

陰影の変化がみられたのは3名(15%)であり、教示の違いが陰影へ与える影響は少ないと考えられる。陰影が変化した3名のうち1名は、美術経験(デッサン)があった。その例では「デッサンの絵を見ると色がついてないより、ついてるほうが実物っぽく上手く感じる。絵を上手く描くなら、線じゃなくて陰影のついた絵じゃないとだめかなと思った」と上手にみせるために陰影をつけたと述べた。陰影は枝や幹の線といった単純な線の加筆よりも難しく、多くの人が用いる技法ではない。しかしながら、美術経験者においては上手に見せるための技法として利用されるのかもしれない。高橋・高橋(1986)は「美術に関心をもってこの技法を用いる被検者は別にして(p 38)」とことわりながら、幅広くなったスケッチ風のラインの解釈を示している。また、描かれた木が何を表すかは「被検者の生活史や面接結果などから得た情報と、全体的評価や描画後の質問(PDI)などから得た情報を総合して考慮しなければならない(p 19)」とも指摘している。今回の結果からも、描画を解釈するうえで、対象者の美術経験は収集すべき情報の一つと言えるであろう。

また、筆圧やサイズも影響を受けにくい描画指標であった。筆圧は描き手の精神的エネルギー水準を表し、サイズは自尊心や活動性、感情状態を表すと解釈される(高橋・高橋, 1986)。安定した精神状態や適切に発達した自我の状態を表す筆圧やサイズは、多くの描き手で一貫しており、「上手に」と意識することでは影響されにくい指標と言える。青木(1980)により、サイズは再検査信頼性のある項目として確認されているが、両教示でサイズが異なった5名のうち、4名は標準教示よりも圧力教示のサ

イズが大きかった。このうちの1人は、「前よりもちゃんと描こうと思って、まず画用紙を全体的に使おうと思った」「上手にと言われたのもあるかもしれないけど、小さいとこじんまりとして上手に描けないかなと思った。ちゃんと上手に見えるように大きく描こうと思った」と述べていた。大きい絵はインパクトがあり、強い印象を与える。「上手に」という教示が、場合によっては大きなサイズを描こうとする姿勢に関係する可能性があり、配慮が必要かもしれない。

3. 2回実施することの影響について

今回の研究では、8名(40%)が教示の違いに気づき、意識して描いたと話した。「上手に」という教示が意識に残らなかったともいえるが、2週間前を思い出しながらの面接であったこと、また後述するように、教示よりも描画体験のほうが印象に残ったのかもしれない。青木(1980)により樹木画テストの再検査信頼性は実証されており、また本研究でも、描き手の精神的エネルギーなど、無意識的・身体的な側面が投射される描画指標は安定していることが示された。しかしながら、日頃絵を描く経験の少ない描き手については、短期間での2回の描画体験が表現に影響を与えた可能性は否定できない。

本研究では、試行順序のカウンターバランスをとるため、1回目に標準教示を行う群と1回目に圧力教示を行う群に分けて実施した。標準教示の方が圧力教示に比べて描画時間の長かった6名は、全て先に圧力教示を実施していた。

圧力のない標準教示にも関わらず、1回目の圧力教示よりも時間をかけた例では、「前回のリベンジ」「今日はこの前よりも上手に描くぞみたいな気持ち」

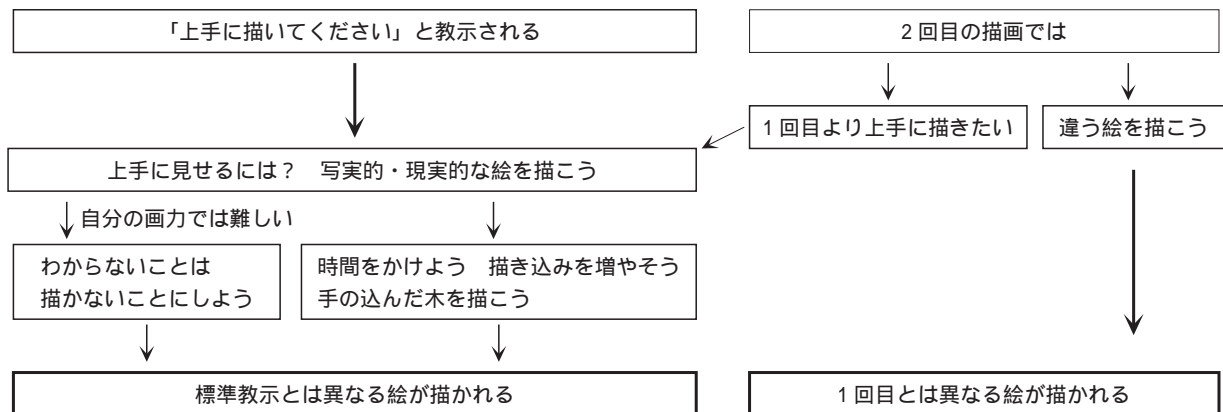


Figure 3 異なる2枚の絵が描かれるプロセス

があったと述べ、描画の変化には「上手に」という教示だけでなく、2回目の実施であることが影響していた。つまり、本研究の2回の描画が異なった理由には、「上手に、と言うのでリアルに描こうと思った」に代表される流れと、「前回とは違う絵を描こうと思った。変化をつけた方がいいのかなと思って、ちょっと気をつかった」に代表される二つの流れが存在したと考えられる (Figure 3)。

圧力教示により「上手に」描くことを求められた描き手には、“写実的な木を描こう”という意識が生じる。そこで比較的簡単な枝の数や幹の表面の描き込みを増やし、結果として異なる絵が完成する。逆に苦手意識がある場合には、イメージが困難な箇所や難しい表現を省略することで、標準教示よりも描き手が考える写実的な木が描かれる。また、教示に関係なく「1回目よりも上手に描きたい」「違う絵が描きたい」という意識が強い場合も、前回とは異なる絵が描かれることになる。

視覚的イメージである描画は記憶に残りやすい。そのため、樹木画テストだけでなく、描画法の研究では施行順序の影響について十分に考慮すべきであろう。また臨床場面では、クライアントの変化をとらえるために、同じ描画テストを繰り返し実施することも少なくない。このような場合には、描画の変化が複数回実施の影響を受けていないか検討し、解釈することが必要であろう。

4. 今後の課題

対象者の感想では、「描いてください、だと落書き程度だけど、上手に、だと適当でいいやという感じはなくなった」「上手にと言われたから、丁寧に描かないとなって思って描きやすかった。木を描いてください、だとかまでやっていいのかわからない」「上手にと言われることで、どういうものを描こうかと考えた上で描くことができた」などの意見が聞かれた。一方で、上手にと言われて「絵が下手だから結構しんどい」「期待されてるのかなと思って、頑張らなきゃと思った」などの感想もあり、「上手に」という教示が精神的な圧力になることが示された。

標準教示は、木を描くこと以外に何も指定しない。しかし、何もなければその描きにくさがあることも示された。描画テストでは「丁寧に」という言葉を使用する場合もあるが、本研究では「上手に」を「丁寧に」と受け取る対象者もみられた。描画テ

ストでは、教示が唯一の刺激である。描き手に十分な表現をもたらす教示とは何か、今後も検討を重ねていきたい。

付記

本論文は平成30年度に提出された中京大学心理学部卒業論文を一部修正したものである。

引用文献

- 青木健次 (1980). 投映描画法の基礎的研究 (第1報) 再検査信頼性 心理学研究 51 (1), 9-17.
- Buck, J. (1948). The H-T-P technique. A qualitative and Quantitative Scoring Manual. Journal of Clinical Psychology, Monograph Supplement 5. (バック, J. 加藤孝正・荻野恒一 (訳) (1982) HTP 診断法 新曜社)
- 降旗孝 (2016). 図画工作・美術への [苦手意識] の実態と解消のための要素 目指すべき造形美術教育の教育コンテンツ開発に向けて 美術教育学研究 48, 369-376.
- Hammer, E. F. (1958). The clinical application of projective drawings. Springfield, Ill.: C. C. Thomas.
- 花田千絵 (2018). 保育者を目指す学生の授業「図画工作」への取り組みについての一考察 苦手意識と学習到達度の相関関係について 作大論集 = Sakushin Gakuin University Bulletin 8, 255-264.
- 原節子・石関ちなつ・田副真美・中村延江 (1985). グラフィック目で見ると診断と治療 (12) バウムテスト 心身医療 5 (2), 5-17.
- 林勝造 (1978). 描画法 懸田克躬・大熊輝雄・島園安雄・高橋良・保崎秀夫 (編集代表) 現代精神医学体系第4巻 A2 3-38. 中山書店.
- Koch, K. (1952). The Tree Test: The Tree-Drawing Test as an aid in psychodiagnosis. Hans Huber. (コッホ, K. 林勝造・国吉政一・一谷彊 (訳) (1970). バウム・テスト 樹木画による人格診断法 日本文化科学社)
- Koch, K. (1957). Der Baumtests : der Baumzeichenversuch als psychodiagnostisches Hilfsmittel 3. Auflage. Hank Huber, Bern u. Stuttgart. (コッホ, K. 岸本寛史・中島ナオミ・宮崎忠男 (訳) (2010). バウムテスト第3版 心理的見立ての補助手段としてのバウム画研究 誠信書房)
- 大辻隆夫・塩川真理・田中野枝 (2003). 投影樹木画法における実の教示を巡る Buck 法と Koch 法の比較研究 児童学研究 33, 19-23.
- 高橋雅春・高橋依子 (1986). 樹木画テスト 文教書院